

# 宋元版禪籍研究(五)

## 宗門統要集・宗門統要統集

椎 名 宏 雄

一

建谿の比丘、宗永の編集にかかる『宗門統要集』一〇巻は、北宋末における禪門の代表的な公案とその拈古の一大集成書である。それは、同じ性格の書、『碧巖集』(一一二五)『宗門聯燈会要』(一一八三)『禪門拈頌集』(一二二六)などよりも、成立の古い点で注目に価する。

しかるに、本書は、元代に古林清茂によって増補された『宗門統要統集』が、大明南蔵以降の諸大蔵經中に入蔵するや、もっぱら統集のみが世に行なわれ、前集は忘れ去られてきた。しかし、北宋期における公案禪の定型化や、入蔵禪籍の性格を知るためにも、前集の考察はきわめて重要である。

かかる観点から、本書の現存宋版のテキスト調査が柳田聖山氏と石井修道氏によってなされている。まず、東洋文庫蔵の宋版一〇冊本は、紹興五年(一一三五)に思鑒禪人が四明

宋元版禪籍研究(五)(椎名)

で覆刻した宋版を承ける淳熙六年(一一七九)跋刊本であり、流布本の統集に付せられる紹興三年(一一三三)の序文にみえる、天寧寺慧沢が莆陽で刊行した宋版とは別本である。東福寺に蔵する重文の五冊本は、部分写真の比較による限り、東洋文庫本と同一版であるらしい。一方、大東急文庫蔵の零本三冊は、巻七のみが東洋文庫本とは異なる宋版で、他は統集の巻九と、巻一〇、一一(補写)より成る。巻七は紹興三年か五年の、いずれかの宋槧と推定される。

ここに、従来未紹介の古版、内閣文庫所蔵の統集一二巻一〇冊本がある。本書の構成は、①統集序、延祐七年(一一三二)〇〇)径山希陵撰、②重開序、紹興三年、耿延禧撰、③序、元祐八年(一一〇九三)姚萼撰、④統集総目録、⑤本文(巻一、一〇)、⑥記、元符三年(一一〇〇)宗永撰、⑦本文(巻一、一一、一二)、⑧(跋)、清茂撰、となっている。右のうち、③④⑤の三つは、従来、他の諸本にみられぬ貴重な新出資料である。

まず③は、元祐八年(一〇九三)に鄧山居士姚孳が撰した序文である。その抄文を左に示す。

釈氏宗永、寓瀉山大円庵、入法界性三昧。従三昧安詳而起、閲諸禪病沈着断見、於是開方便門、示真實際。上繇鹿苑垂五十年、下逮曹溪歷十二世、凡我仏祖演説、附以古宿拈提、沿波討瀾、挈奏振領、得一千余則、離為十卷、命曰宗門統要。將令觀者、目擊道存。書成、持以属余序。……(中略)……

元祐八年九月望日 序

右文によれば、宗永による本書の編集は瀉山の大円菴でなされ、しかもそれは元祐八年よりも以前であったことが判明する。ちなみに、姚孳は熙寧の進士で、元祐中に武陵の令となつた人である。しかるに、前集の初刻は、元祐八年にはなされなかつたごとくである。内閣本巻一〇の末尾に刻される⑥の「宗門統要集記」こそは、編者宗永みずからが本書編集の綱要をのべる記録として重要である。

……(前略)……余嘗試論因縁語路、誠先德不得已而興、至今簧鼓叢林、何嘗不在是非同異之間者哉。既往不咎祈嚮可乎、輒擬古今節要機縁凡一千余則、首標宗胤、次列因縁、□□拈提代別、撫先天之要妙、□□□之見聞、就中刪補泛濫異同故、不雄成逆寡、蓋取乎大意而已。窮諸詳悉、如各人所集。可見此不脩載、博覽賢達、無以封文見讓、則幸莫大焉。

時巨宋元符歲次庚辰中秋日 建溪宗永比丘録次故書云云

右文に存する元符庚辰(一一〇〇)の年時は、③の序からは八年を経てゐる。したがって、宗永は姚孳の序をえたのち、さらに推蔽をへた八年後に、みずからの記を付して刊行したものと推定される。ともあれ、本書の成立は、従来は紹興三年(一一三三)以前としか知られなかつたが、実に四〇年も遡ることが判明したのである。それは、仏国惟白の『靖国統燈録』(一一〇二)よりも古い、一一世紀の編集であつた。

宗永とはたれか。天衣義懷—法雲法秀(一〇二七—一〇九〇)を承ける、雲門宗七世の金陵天禧寺慧嚴宗永が擬せられる。この人には『続伝燈録』一二などに短文の語句が伝えられるにすぎないが、年代的にはふさわしい。また、前集は機縁の語句を収める祖師の順序を、南岳下—青原下の順に排列し、系譜別の詳細な目録を各巻首に置くが、その末尾は雲門宗五世の円通居訥である。これらにより、前集の編者は、仏国惟白と法兄兄弟に当る慧嚴宗永その人とみてよいであらう。

## 二

古林清茂(一二六二—一三二九)による統集の編集は、流布本に存する径山万寿寺希陵による延祐七年(一二二〇)の序により、従来はこの年の成立といわれてきた。しかるに、内閣本には古林みずからの書、前掲⑧が補写されている。この一文は、統藏所収の『古林和尚語録』五巻、『古林和尚偈頌拾

遺」六巻中のいずれにもみられぬ逸文である。

宗門統要集、元符間、建溪沙門永藏主所集也。既統其宗、復会其要故、直指之道、昭著盛世、若揭日月。……(中略)予固不揣、遂取元符已後南岳下自十二世至十八世、青原下自十一世至十四世、未有興斯集者、統而集之、二家見録機緣共二百六十一則。至於拈徵代別、添入頗多、亦永公之遺意也。總目之回、統集宗門統要。……(中略)……書成於泰定改元之冬、明年、湖州道場玉山瑛西堂、指金叢粹、以壽其伝、懋德豐功、当興此録同不朽也。

金陵保寧禪寺嗣祖沙門清茂書

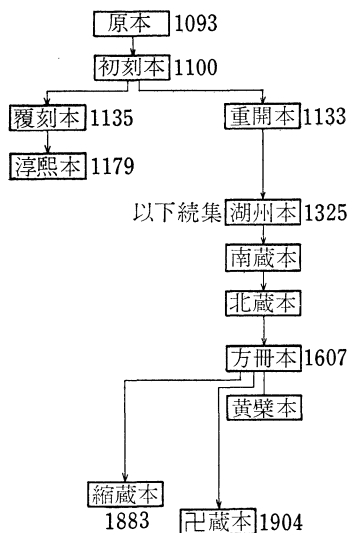
内閣本は、右の補写を何に依つたのか。この点、右文の次に「東嘉謝君明刊」なる刊記をも補写しているから、刊本に依つたことは確かである。あたかも、前掲の宗永による自記の末尾にも同じ刊記をとどめる。つまり、古林の跋文は元来、続集の初刻本に存したことを知る。

右文によれば、古林による続集の定稿化は泰定元年(一二三二四)であり、翌年に湖州道場山の玉山瑛西堂の力によつて、はじめて刊行されたのである。内閣本の各巻末尾には、「比丘懷瑛」による施財刊板の刻記が存する。すなわち、懷瑛の施財により、謝君明が刊行したのが続集の初刻本であった。内閣本こそは、この元版の現存唯一本と認められる。

注目すべきは、内閣本の巻次編成である。すなわち、巻一と巻一〇までは前集と同一であり、巻一一に南岳下、巻一二

宋元版禅籍研究(五)(権名)

に青原下の、各増補部分を配する前集の編成に忠実な一二巻本である。目録の配置も前集に等しく、ただ東洋本に目録の前の宋版に基づいていることを示唆するものである。かくして、続集の流布本二二巻は、元版の初刻本を細かく分巻し、目録を一括して巻首に移し、宋版の二つの序跋と、初刻本の跋を除き去つた異版であることが明らかとなった。すなわち、本書は宋版の体裁を払拭する過程に、入蔵の榮譽や禅門の盛衰の歴史を秘めるものである。さいごに、本書各版の系統を示しておく。



(駒沢大学講師)